

## 米マサチューセッツ工科大学(MIT)メディアラボ副所長

## 石井裕(終身教授)

## ロング・インタビュー by 山岡淳一郎

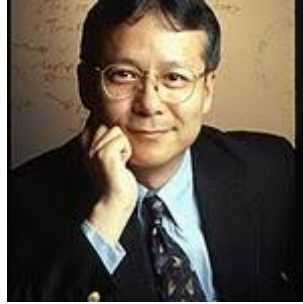


Photo Credit: Webb Chappell



「震災を受け止め、ゼロから未来を創るために  
若い世代とデジタル技術ができること」

(日経ビジネスアソシエ 2011年8月2・16日号)掲載・詳細版

デジタル技術による表現やコミュニケーションの研究機関として世界最高峰に位置するMIT メディアラボ。石井裕さんは、日本人初の副所長を務め、ラボをけん引してきました。エネルギッシュで、全身「火の玉」のような教授です。

石井さんの講演を初めて聞いた時、この人を書きたい、と思いました。暗喩と論理が重層的に絡まり、小宇宙を形作っているようでした。言葉が猛烈な速さで飛んでくる。それでいて、言葉の一つひとつにアナログ人間の私にもわかる「情」がこもっていた。だから書きたくなったのです。「利」と「理」だけでは人は動かない。「情」が行動の起爆剤になります。

以来、札幌、東京、ボストンと取材にかけめぐり、アエラ「現代の肖像」(2011年4月25日号)に人物ノンフィクションを掲載しました。

今回のインタビューは、2011年5月22日、忙しい講演の合間を縫って石井さんに時間をつくっていただき、港区白金の日経BP本社の眺めのいい会議室で行いました。

石井さんは、研究者、教育者、経営者の三つの顔をもちます。インターフェース分野で「タンジブル(手で触れて感知でき、実体がある)」という未来像を打ち立て、変革をもたらしてきました。その透徹した目には、「3.11」以後の日本がどのように映っているのでしょうか。

大震災から復興に向けて、ネットによる救済活動、個人や企業の役割、次の世代に渡すべきバトンについて語り合いました。石井さん、日経ビジネスアソシエ編集部のご厚意に感謝し、インタビューの詳細を掲載させていただきます。

山岡淳一郎

2011年9月



## 石井裕

米マサチューセッツ工科大学 (MIT) 終身教授メディアラボ副所長

Photo Credit: Aiko Suzuki



## 山岡淳一郎

ノンフィクション作家

Photo Credit: Goh Fujimaki

対談の内容

■ [ボラントゥイーターたちの活躍](#)

■ [「高き住居は児孫に和楽……」クラウドが現代の石碑になる](#)

■ [手書きの石巻日日新聞と「タンジブル・ビット」](#)

■ [殴られても、殴られても立ち上がる「レジリエント」な社会へ](#)

以下、I=石井裕、Y=山岡淳一郎

## ■ボラントウィーターたちの活躍

Y 3月11日の震災発生後、早い段階で、ネットでさまざまな動きが始まりました。ボストンで、どのようにご覧になっていましたか。

I 震災発生時、米国東部は午前一時前でした。私は起きて仕事をしていて、突然ツイッターで大きな地震があった、と知った。さらに津波で大変なことになっている、と……。それは家内(ジャーナリストでメディア研究者の菅谷明子さん『メディアリテラシー 世界の現場から』『未来をつくる図書館 ニューヨークからの報告』とともに岩波新書の著者)が、教えてくれたのかな。で、何が起きたんだ、とツイッターに入り、多くの報道機関や情報源に接して、明け方まで情報を集めました。

Y まずは、どこで何が起きているか、知ろうとされたのですね。

I はい。と、同時に世界中の友人、知人から、君の家族が無事であることを祈るというメールが、ものすごい数で入ってきました。安否を心配してくれる連絡です。それを見て、東北地方に私自身の家族や親戚はいないのですが、被災された方々が親きよだいや親戚、友人、愛する人の情報を得ようと必死に電話をかけておられる姿が目に見えました。膨大な量の個の発信が集中する。電話会社は、個の量が多すぎるとシステムが自動的に制限をかけて発信できなくなってしまう。それによって、ますます不安とパニックが拡大するのではないかと非常に心配になりました。大変な数の人びとの情報が遮断される。そこからくる混乱を考えると、何か、自分ができることはないか、とずっと考えました。

Y 日本電信電話公社、NTTで研究者としての土台をつくられた石井さんならではの感懐ですね。そうした思いは、ネットのなかで瞬く間に広がりました。

I ツイッターの世界にはボラントウィーター(ボランティアで情報を集め、整理編集して発信する人)という言葉があります。震災発生当初、ネット上の情報も玉石混交でゴミもいっぱいありました。ボラントウィーターが、情報のソースを確認し、信頼できるものを自分のフォロワーたちに伝えました。私自身は、1万5000人ぐらいのフォロワーがいますが、まずニューヨーク・タイムズやウォール・ストリート・ジャーナルなどの情報をできる限り取りまとめて、オリジナルな形で日本へ届けました。震災後1週間くらい、続々とボラントウィーターが現れました。

橋本麻里さんも、その一人。彼女は現代美術のキュレーターで、『BRUTUS』などで素晴らしい記事を書いています。情報をフィルタリングして一生懸命中継しておられた。

ジョイ伊藤(=伊藤穰一さん。2011年4月、公募でMITメディアラボ所長に就任)も、価値ある情報のネットワークづくりに参加していました。彼はドバイにいましたが、日本で起きていることを世界につないでいた。ボラントウィーターは人と情報を結ぼうと不眠不休で活動していた。私も、その末端にいたのですが、Evernoteが活躍しましたね。Evernoteにニューヨーク・タイムズの解説記事とか、日本政府の記者会見などの情報をどんどんクリッピングしてゆきました。

Y 日本のマスメディアでも、かつてない波動が起きました。

I そうそうNHKテレビがUstreamの放映を始めましたね。これは大きな効果がありました。しかも、無名の誰かが、民放を含めて四つテレビ局の放映を、一つのスクリーンでまとめて見られるインターフェースをつくった。そのURLを、確か、ジョイ伊藤が教えてくれました。それを開けておけば、四つの放送が同時に見られる。日本の地上波が届かない場所に住む私たちは大変助かりました

Y 今回の震災後、ネット上の情報は、一時的には大混乱するけれど、ある秩序の方向に収斂されていくのを感じました。特定の編集権をもつ人がいるわけでもないのに情報が整えられていくのは、ボランティアの存在が大きかったのですね。

I 既存のマスメディアにはプロの編集者がいて、中身をチェックしているわけですが、ツイッターの世界でも個人として信頼されている媒介者がいるわけです。たとえば糸井重里さんは40万人ぐらいのフォロワーがいて、とても影響力がある。しかも真実を簡明な言葉で表現します。そういう方々が、ソーシャルメディアでプロの編集者の実力を発揮された。ボトムアップの草の根で、起きています。だからソーシャルメディアって強烈なんです。

それと、いわゆる全国紙や全国ネットの放送局などの大手メディアだけでなく、東北地方の地元メディアも重要な役割を果たしました。地方紙の福島民報とか、宮城の、河……。

Y 河北新報。

I そう。福島県に私の友人がいて、その人が、原発事故による福島のひどい状況、とくにマスメディアが伝えないことなどをツイッタースフィアで伝えてくれました。さらにグーグルのクライシスレスポンスチームの活躍により、被災地の行方不明者や避難者の名前を書いた張り紙が、携帯電話のカメラで撮影られ、それが写真共有サービスにアップされた。その映像を文字に起こして、探し人を検索できるようにするために世界中からボランティアの支援が集まりました。

ネット上で、今、誰が何を必要としているのかを、個人個人が懸命に把握しようと試み、質のいい情報をつなぐ自発的な力が働いた。これは記憶しておきたいですね。

続く => [■「高き住居は見事に和楽……」クラウドが現代の石碑になる](#)

## ■「高さ住居は児孫に和楽……」クラウドが現代の石碑になる

Y なるほど。一方で、足りなかった部分といいますか、これがあれば、もっとよかったのにと行った点は何かでしょうか。

I 大量の情報が高速で流れても、肝心の被災地では、「子どもがいない」「お父さん、お母さんはどこ」とパニックが起きている。食料がない、ガソリンがない、医薬品がない。どんどん被災地は孤立して、救援、復旧へのサプライチェーンが寸断されました。

食品や運輸、エネルギー、医療関連の企業などは、それぞれ独自のサプライチェーンを持っています。危急存亡のときには、互いに共有して、最適なロジスティクスを構築できればいいのですが、それは残念ながら、まだできていません。

現場からは、必死でいろんな情報が発信されます。「痛い」「助けて」「寒い」「食べ物がない」といった具体的なニーズを、場所や種類によってタグ付けし、供給側の情報をつなげていく。全体を見渡す視点がありませんでした。

被災地では、限られたリソースで、必死にやっていたと思います。しかし、それを受けとめて平常時のルールを超えて、緊急のロジスティクスを動かすしくみがなかった。言い換えれば、モノとシステムはあったし、自発的に動くヒトもいた。でも、それをうまく動かす情報の流れをつくれなかった。たとえば、ここにペットボトルのお茶は一本しかない。それを皆でどう分け合うか。危機管理に対応した情報網の構築が、これからの最大の課題でしょう。

Y 運輸関係者に聞いた話なのですが、震災発生直後、政府は大手運輸会社のトラックをゴッソリ押さえたそうです。ところが指揮命令系統がはっきりせず、大手は、上からの指示が下りてこなかったために身動きがとれなかった。一方で、三陸の津波被災地などでは、業界6、7番手の運送会社のトラックが走りまわっていた。そこは、トップの判断で三陸にトラックを送りこんだのです。あの緊急事態では、組織より「人」という部分もありました。

I 象徴的な話ですね。ボトムアップで、痛切なニーズが行き交っている。それをちょっと高い視点で、理性をもってコーディネートする。ふだんはアライアンスを結んでいない運輸会社のトラックを、融通し合うための調整をする。政府では、現場の重要なニーズを全体的に把握するのは難しいでしょう。よりコミュニティに近い、しかし客観的にとらえられる位置で情報をさばく役割が求められます。

Y 新しいパブリックと言いますか、コミュニティに近いところで公共のニーズ把握し、ネットとつながって、現実に対応していく。そういう役割ですね。誰が、それを担うのか……。

震災後、私は福島県南相馬市取材しています。ここは、ご存知のとおり、海岸地域が津波で壊滅的な被害を受けた上に原発事故で、地域が原発の20キロ圏、30キロ圏で分断されました。震災発生から1~2週間は、住民が外へどんどん避難する一方、物流は完全にストップ。ガソリンはこない、食料はこない、医薬品や救援物資も入らない。街はゴーストタウンになった。南相馬市の桜井勝延市長は、YouTubeに出て、怒りをこめて日本政府の対応を批判し、「われわれは兵糧攻めにあっている」と惨状を全世界に訴えました。そこから、かつてない現象が起きました。

I 桜井市長のメッセージは衝撃的でした。米国のタイム誌は「世界で最も影響力のある100人」に市長を選びましたね。

Y はい。YouTubeで桜井市長が発信すると、世界のメディアが南相馬市にどっと入ってきました。日本の大手メディアは原発30キロ圏内に「自主避難」の指示が出ると、支局も取り払って、いったん外に出ました。入れ替わりに外国メディアが入ってきて、現状を全世界に発信したのです。すると日本政府の対応も変わってくる。中央省庁から官僚が南相馬市に派遣されて、現場に張りつく。現在、南相馬市の副市長は総務省からの出向者です。

I 何だか、皮肉ですね。

Y これは情報が国内、世界と共有されることで、現実を動かした一例かと思います。そういう出来事を、私たちは記録しておくなくてはならない。

I 青森から、岩手、宮城には、明治29(1896)年の三陸大津波(岩手県の綾里湾の奥では津波高38.2メートル)と、昭和8(1933)年の大津波(岩手県唐丹村で11.8メートル)の教訓を「石碑」に刻んで建てています。

Y 「高さ住居は尻元に和楽 想へ惨禍の大津波 此处より下に 家を建てるな」ですね。

I 時代とともにいついつい人間は過去を忘れていく。それでも「石碑」は絶対に必要なのです。僕らがやっている情報インターフェースの研究は、突き詰めるとあの石碑を作るのに似ています。現代は、たぶんクラウドが、その役割を担う。広島の大惨劇の記憶を風化させないために原爆ドームが保存されているように、3.11の大震災を忘れず、次に備えるために現代の石碑を作らなくてはならない。震災で味わった数々の経験を体系化してネットワークにアーカイブする。それは情報革命後に生まれ育った人びとの使命だと思う。

復興、危機管理、そしてアーカイブ、日本とともに生きる私たちがやることは、いくらでもあります。会社も個人も昨日の延長では生きのびるのが難しくなった時代に、ゼロから未来を創ることでもありますね。

Y こうやって対談させていただくのも石碑づくりの一環(笑)。

I 重要な情報の周りには、いくつもの分厚い壁が立ちふさがっています。そこを突き破って、社会と人がつながって、よりより関係を結んでいく。そのためにはできることは何でもやる、と……。

Y おっしゃるとおり、震災を経験し、個人の高い意識や行動力、企業もつインフラなどを、どう社会の危機に生かすか、という課題がクローズアップされています。そういう行動に参加したいと願うビジネスパーソン、自営業者、学生、主婦、高齢者、さまざまな立場の人がいます。でも企業勤めの若い世代は、なかなか思いきれない部分もあるでしょう。

I 会社は法人ですが、社長は人間、副社長も人間、部長も課長も人間です。あの圧倒的な震災に直面したら、ある種、純粋な気持ちになります。会社のもっているリソースで何ができるか、社内でもいいアイデアを思いついたら、「社長、これはどうでしょうか」と議論できる環境があれば、いろいろなことが可能になりますよね。震災が起きたのは、金曜日でしたが、翌週月曜に支援会議を立ち上げて行動を開始した広告会社など、実際に会社が救援に動いた例は、いくつもあります。

Y 先ほど触れた運送会社もそのひとつでした。社長の一存で、支援に動いた。

I その基本もやはり個人なんです。第二次大戦中、ナチス・ドイツの迫害を逃れてリトアニアに流れ込んできたユダヤ系難民たちに、外務省の訓令に反して大量のビザを発給した日本人外交官の杉原千畝さんがいらっしゃいました。あのビザで6000人もの難民が救われたといわれます。そこまで高潔な行動は難しくても、決断力と行動力のある個人がうまく既存の組織を利用すれば、あるいはネットで個人を結ぶ組織(コミュニティ)をつくりあげれば、その力で多くの人を救えるのです。

Y ただ、企業の若い人は、どうしても上の顔色をうかがってしまう。ここで突出したら、叩かれるのではないかと慎重になってしまう。

I 上に立つ人、トップの社長が「緊急時には従来のルールを創造的に破壊する。その際の責任は問わない」と明言すべきです。天災の多い日本で、会社を経営する者の責務だとさえ思います。逆に若手が「救援活動のアイデアはあるけど、仕事に関係ないと怒られるかも」と考えてしまい、社内のコミュニケーションがとれない会社は、厳しい言い方かもしれないけど、この先、生き残るのは難しい。会社は、ひっくり返せば社会です。社会に存続していくには、社会とつながって、支えていかなくてはなりません。

続く => [■手書きの石巻日日新聞と「タンジブル・ビット」](#)

## ■手書きの石巻日日新聞と「タンジブル・ビット」

Y 個人なり、組織なりが社会とつながる、という意味では、情報の価値は「行動を喚起するか否か」ですね。たとえば被災者の方が、情報を得て、何らかの前向きな行動をとれるかどうかです。傷ついた心が癒される和合亮一さんの詩(詩集「詩の礫」、アエラ2011年7月4日号「フクシマで生きる この魂の叫びを 聞いてほしい」)は、読み手の精神の深い部分を揺さぶっています。それが世界的な反響を呼んでいる。

また、石巻日日新聞は、停電で輪転機が使えなくなったので、油性ペンと新聞用紙を使って「壁新聞」を作り、震災翌日から6日間、市内の避難所などに掲示しました。記者のひとり、津波に吞まれ、船につかまってひと晩明かしたそうです。彼らが、被災地で必死に発信した情報には、強い普遍性を感じます。

I その情報がリアリティーを持つかどうか重要なのです。その前では、アナログもデジタルも関係ありません。被災された状態で、たぶん懐中電灯だけを頼りに手で記事を書いていく。その行為がもつ力ですよね。きれいな印刷やスクリーンでは、人間の身体性や思いはなかなか伝わらない。その意味で気迫といえますか。何が壁新聞を作らせたのか。その状況でも住民に何かを伝えようとするジャーナリズムの魂、それが、リアリティーの根源にあります。

Y 石巻の壁新聞を知って、石井さんの「タンジブル・ビット」の原点ともいえる宮澤賢治の肉筆原稿のことを私は思い浮かべました。

I そうなんです。私は、MITに入る直前、岩手県花巻市の宮澤賢治記念館で「永訣の朝」という詩の肉筆原稿を見て、衝撃を受けました。インクの染みや何度も書き直した筆跡に、農作業で節くれだった指で、懸命に気迫をこめて賢治が書いている姿が浮かんできました。苦悩する精神の軌跡が感じられ、万年筆の切っ先が紙をひっかく音すら聞こえてきました。あのリアリティーが、情報に直接手で触れる「タンジブル・ビット」という発想の源です。

石巻日日新聞の方が、必死に手で書いた「壁新聞」には、何とか被災者に大切な情報を届けたい、勇気づけたいというジャーナリズムの原点を感じます。南相馬市の桜井市長のYouTubeでの発信からもリーダーの気概が伝わってきました。

どちらもすごくリアリティーがありました。情報を扱う私たちは、そこを本気で考えねばならない。リアリティーは情報の生命線です。

Y 情報や表現に携わる私たちは、そこを肝に銘じておかねばなりませんね。肉筆の壁新聞が、被災者の方々に生活情報を伝えながら、慰め、勇気づけた現実。あれ自体が、現代の石碑なのかもしれません。

ところで、震災からちょっと話はそれますが、4月に伊藤穠一さんがMITメディアラボの新所長に就任されました。これでメディアラボのトップ2が日本人になったわけで、ニューヨーク・タイムズも「異例の選択」と報じましたが、あの人事は誰がお決めになったのですか？



I 驚きでも何でもありませんよ。僕らが決めたんです(笑)。所長も副所長も日本人というのを面白がられますが、たまたま二人の国籍が日本ただけです。要するに、彼個人の實力と実績が評価されたのです。人種とか、肌の色とか、まったく関係ありません。

ジョイ伊藤の社会起業家的なパワーと、ネットワーク力、新しいカルチャーへの洞察や理解が、彼を新所長に迎えた理由です。メディアラボは、米アマゾンの電子書籍リーダー「キンドル」に使われるEインクや、グーグルの「ストリートビュー」のひな形になるサービス「アスペン・ムービーマップ」など、全く新しい流れをゼロから創ってきました。「未来ビジョン製造所」と言われています。

パソコンの父、アラン・ケイは、「未来を予言するためのベストの方法は、自分たちで未来を発明することだ」と言いました。それがわれわれのモットーです。ジョイ伊藤は、今、メディアラボが次の未来を発明するために必要な「個人の良さを引き出す」人物なのです。だから、彼に白羽の矢を立てました。

Y 伊藤さんはメディアラボの「未来像」の創造に欠かせない人物なのですね。そういう意味では、現在の日本は、未来像を渴望しています。ところが政治的混迷もあり、まったく見えてこない。

続く => [■殴られても、殴られても立ち上がる「レジリエント」な社会△](#)

## ■ 殴られても、殴られても立ち上がる「レジリエント」な社会へ

Y 現実的には復興が大きなテーマですが、個人的には、鎮魂、復旧、復興のプロセスが大切だと感じています。このプロセスを無視して、火事場泥棒的に復興へ群がる勢力があるとしたら、未代まで禍根を残すと思います。復興についてどのようなイメージをお持ちでしょうか。

I もちろん被災者の方々の生活の復旧は大前提です。ただ復興という場合、タイムスパンがものすごく長くなるでしょう。10年、20年、もしかしたら100年、200年単位かもしれない。アントニオ・ガウディのサグラダ・ファミリアみたいに延々とつくり続けなくてはならないかもしれません。その場合、大きな構想が求められるでしょう。

国土計画は専門外なので、軽々には言えませんが、かつて田中角栄首相は「日本列島改造論」を掲げて、日本をリードしました。その方法論は、功罪相半ばしており、否定的な見方もあるでしょう。ただビジョンとしては明瞭でした。日本の土木専門家のなかには、太平洋側はこれからも地震や津波の被害を受けるはずだから、日本海側に大動脈を通して、産業拠点をつくる構想を掲げている方々もいるようです。太平洋側が被害を受けたら、日本海側がバックアップしようというわけです。それが実際にいいプランかどうかは、わかりませんが、発想のなかに未来像に連なる視点があると思います。

Y それは何ですか。

I 「レジリエント(弾力性のある、回復が早い)」という考え方です。太平洋側の危機を日本海側でカバーするところに感じとれます。日本は、今後も自然災害や経済危機などさまざまなクライシスが発生するでしょう。そのときに、殴られても、殴られても、倒されても、倒されても立ち上がり続けなくてはなりません。ちょっと矢吹ジョー的ですけど、何度強烈なパンチを食らってダウンしても、必ず立ちあがる。社会として、そんな体力と気力を備える。すなわち「レジリエント」なものでなければいけないと思うのです。

そのためには百年単位の長いスパンで物事を考えねばなりません。日本海側に交通の大動脈を移し、産業拠点を計画配置しようと唱える日本の大学の先生たちの発言は、経済、生産機能を分散し、震災リスクに備えようという物の見方でしょう。交通の大動脈は、日本の背骨ですよ。それをしっかりしたものにしておこうというのは説得力があるでしょう。

Y 日本は、今後も間違いなく、地震が起きます。1970年から2000年の30年間、震度5以上の地震が起きた回数の国際比較があります。イギリスは0、フランスとドイツは2回。国土が広大なアメリカでも322回。これに対して、国土が狭い日本で、なんと3954回も発生しているのです(「原発に頼らない社会へ」田中優著)。地震列島に住んでいるからは、殴られても、殴られても立ちあがらなきゃいけない。ご専門の情報通信の分野では、どのようにレジリエントな体制を構築すればいいとお考えでしょうか。

I 情報技術でいえば、電話網、とくに携帯系のあり方を見直すべきではと思います。震災で電話が繋がらなくなったのは、トラフィック(通話量)の爆発を抑えるようシステムが設計されているからです。大地震が起きたときに、真っ先に心配したのはこれ

でした。不安だから電話するのに、システムが自動制御をかけて発信できなくする。それではますます不安とパニックが拡がってします。

Y 福島県相馬市の原釜の漁師さんたちは、地震の発生直後、船をあえて津波に向かって発進させて乗り越えました。百隻以上の船が、津波の被害を免れました。ところが、自分たちが乗り越えた大津波が、家族や友人、知人が暮らす陸へ向かって突進していく。「早く逃げろ」と家族に伝えたい。でも、携帯がつながらなかった。このときほど携帯が恨めしかったことはない、と言っていました(アエラ2011年7月25日号「津波がきたら 沖へ出る」)。

I ……痛ましいですね。従来の考え方は、システムがダウンしたら復旧が大変だから、防御のために先に切るというものです。でも、ダウンしてもいいからすぐ再起動するレジリエントなネットワーク、という考え方もある。「お母さん、どこにいるの」「津波だ、早く逃げろ」という電話をぎりぎりまでつなぎ、ダウンしたらすぐに再起動。「明けましておめでとう」コールが集中するお正月の制度とは、ちょっと違ったロジックで、ぎりぎりまでもたせる。あるいはダウンしても、早く立ち上げればいい、と考えてみる。システムを守るという発想から、たとえシステムが一時的にパンクしても、ぎりぎりまで助ける。

映画の「タイタニック」で、最後まで演奏したミュージシャンがいますね。ああいうのはナンセンスなのかと、一方で技術の問題としてどこまでできるのか、いつか公開の場で議論してもいいのかもしれない。

レジリエントなネットワークというのは、空手の「寸止め」ではなく、殴らせる。

Y 大山倍達の実戦空手だ。

I 「想定外」があり得る机上の空論ではなく、実際に壊されても、すぐに立ち直る。そんなレジリエンスを、情報通信を含む社会インフラの中に埋め込んでいく必要を感じました。

Y 緊急時のロジスティクス、現場のニーズに対応したコーディネーターも、レジリエントな視点から、イメージが浮上してきますね。自治体レベルでやるべきことは山のようにある。でも、県は役に立たない。国は遠すぎる。そこで、誰が、どう動くか……。

I 情報伝達の専門チーム、情報のハブになるコーディネーターがいてもいいのではないのでしょうか。たとえば、個人が通信機材やバッテリー、すべて持って、サテライトも通じるようにしてワンマンバンドのように番組を放映するジャーナリストがいますよね。情報のコーディネーションのプロです。そういう人がハブになって、全体のプランに向き合う。

情報収集に長けて、優先度づけの能力と権限を持ち、支援のない状況下で通信をつづけられる。ハードとソフト両方のスキルがある人を育てていくのです。トム・克蘭シーの小説に出てくるジャック・ライアン(CIAの情報官)みたいな存在かな。

そうして育成されたコーディネーターが、バッテリーを満載し、機材を積み込んだトラックで気仙沼や南三陸町などに駆けつけて、ある範囲でハブ機能を果たす。空港の管制官のような役割でしょうか。インフラ復旧までの間、何十キロかの圏内の救援要請や情報の交通整理は、すべて面倒をみる。そういうチームや個人が何百人もいて、自治体や組織の壁を越えて、情報を必要なところに誘導する。自律分散したサブネットの中で、ハブになる人びとが連携し合う。

ネットの上では、個人で情報のハブになり、良質の情報を必要とする人に流し、需要と供給のマッチメイキングを行う。そういう素晴らしいボランティアが何百人も出てきています。情報への適応度が高い、若い世代が、訓練と経験を通して、その役割を担ってほしいですね。

Y そうなってくると自治体は必要だけど、都道府県っていらなくなるかも……。

I 従来の行政の枠を突き抜けた情報のプロがきつと、出てくると思いますよ。そのためにも、後世へ残す「石碑」をつくらなくてはなりませんね。

Y 鴨長明の「方丈記」なんて作品も、延々と天変地異や飢饉を書きつらねています。物書きにとって、あれは石碑でしょう。

I そうかもしれませんね。そろそろ成田空港に向かうバスの時間です。

Y お忙しいところ、ありがとうございました。面白かったです。

I 時間がなくて残念です。では、また。

(2011年5月22日 日経BP 本社にて)